

素晴らしい須走を知りたい！

「すばらしい隊」養成講座 第7回講座概要(チェック前)

第1部：座学 須走の町を知る「須走地区の歴史や文化資源について」

■日時：令和元年11月9日（土）9時～12時

■場所：須走東災害対策センター

■講師：博林 一美氏 小山町文化財保護審議会 委員長

■講義概要

1. 須走の特徴

—①交通の要衝 ②富士山の登山口 古代から町史に書かれる事件や出来事はこの2つに関係して起こっている。

—籠坂峠を越える道が須走を通っていた。須走が古くからこの道の拠点であったということ。なぜそんなことが言えるのか？扇屋旅館の玄関を入れると古墳時代の壺などが並んでいる。改築する時に地面の下から出てきた古墳時代の土器。そのことからも集落があったことが証明できる。138号を上って、富士高原ゴルフの辺りにおおおね遺跡、おとぐち遺跡があった。縄文時代の再末期から弥生時代の初めにかけての遺跡があったということが、出てきたカメや壺から証明できる。その時代から須走から籠坂峠へ越える道が通っていて、人が住んでいたことが分かる。御厨から甲州へ越える道がいくつか言わされているが、証明できる遺物が出土する場所は須走のみ。古事記には足柄峠で山の神、坂の神である白い鹿をヤマトタケルが殺して酒折宮（甲府）へ向かったという記事がエピソードとして載っている。足柄峠から甲州へ抜ける道はここを通っていたと思う。文献上からも古くから交通の要衝である。足柄峠を越えないと、東西どちらに行くにしても須走が要衝で、そのためには御殿場・小山の御厨一帯は交通の要衝である機能がたくさん残っている。そこも特徴の一つ。江戸時代になると御厨から外へ出る道には関所がいっぱいできる。1つは、「箱根の関所」。足柄峠を越える道には「矢倉沢の関所」。相沢川を下ると「谷ヶ関所」がある。山の方から相沢川（酒匂川）を下っていく道には山北の安戸にあった「川村関所」。御殿場から箱根仙石原へ越える道には「仙石原の関所」があった。御厨から甲州へ越える道には須走に「十分一役所」があった。通る荷物や人から、荷物の運搬料の十分の一を税金として納めろという関所。今町有地が残っているが、そこが十分一役所。ここは、交通の要衝だったということ。

—江戸時代になると、宝永の砂降り。宝永4年の富士山の噴火で3m積もった所。そのために伊奈神社が造られている。御厨の他の村は砂除けをするが、須走は3mも積もったので幕府にお願いして年貢を納めるからお救い金をもらって、町並みを砂の上に再興するのが税金を納める条件として1811両幕府からもらう。他の御厨の村は、砂除け金が出なかったが、3年後位に他の村は砂を除けた分だけ、お救い金がもらえた。ここは宝永5年にすでにお金の支給がなされた。その年の夏の富士参詣はもう須走の町並みが出来て行われた。そういう資料が残っている。伊奈神社が最初にできたのは須走で、幕末。他の村はそれから20年位経って吉久保にできる。伊奈半左エ門を神様としてお祀りする。小山町のあちこちにあった伊奈神社がここにまとまるのは昭和30年過ぎてから。それまでは正式な神社として認められていなかった。これができるから、神社庁に申請して、神社として公式な行為ができるようになった。

—明治になると、須走で一番大きな出来事は、廃仏毀釈。神仏分離令、神様と仏様がはつきり分けて



考えられるようになった。須走は富士山の大明神が富士山本宮浅間大社にいたが、その人が富士山の山麓の大きい浅間神社に指示して、麓の村々の人々を全部神葬祭に変えましょうと。村中の仏さまをなくして、神道にしますという事が一番熱心に行われた地区。須走、富士吉田、富士宮、須山(御殿場も含む)。御殿場の場合、天然寺の住職 本田松山という和尚さんが廃仏毀釈の時に神主さんになる。杉名沢の村の人たちを全部神道に変えて、永原大神宮を建てた。原里とかの人たちを全部神道にした。御殿場は神道が多い。須走もお墓へ行くと良く分かる。六地蔵などお寺に必ずあった仏像の首が無かつたり壊されたりしているのが今も残っている。

－これが須走の特筆できる他にない特徴。

第2部：体験「須走地区の歴史・文化資源めぐり」

■講師：博林 一美氏 小山町文化財保護審議会 委員長

■場所：須走地区内

■体験概要

その1

－伊奈神社

晴れないと富士山が宝永山まで見える。上がった火山灰が北東方向へ江戸まで流れているので、この辺が一番積もった所。この辺は下から色々なものが出てくる。ボンベイと同じで、江戸時代の街並みがそのまま埋まっている所。噴火の5日後くらいに幕府の役人が須走へ来て、その風景を描いた日記がある。それを見ると浅間神社の鳥居が頭だけ出ていたと書いてある。ほとんどの家は軒まで砂が積もっていた。壊滅状態というが、そのまま残っている所がなくはなかった。砂降りの後、幕府は災害復旧の名目で、各大名から1万石につき2両ずつお金を集める。全国の大名から集めて48万両が幕府に入る。災害復旧に使ったのは16万両。あとは江戸城の北の丸御殿の修築などに使う。そのうちの1811両が須走にきた。唯一、村の復旧にお金が出た。酒匂川の砂ざらいをする名目で幕府から伊奈半左エ門が来る。お金を使い何度もやるが、やるたびに洪水が起り、100年近く酒匂川の下流の人たちは元の村がどこか分からなくなる川が氾濫した。今の南足柄市、開成町あたり。伊奈半左エ門は5年間御厨の領主。亡くなったのと、亡くなった日は分かるが亡くなった理由はいまだに分かっていない。御厨の言い伝えでは、御厨の住民を助けるために駿府の米蔵を開いて御厨の人たちに米を配ってしまい、それが発覚して処刑されたとか、自殺したとか言われている。それは嘘。神として祀られたのは本当。噴火直後の飢えた人たちに配ったお米やお救い金、そのほ



その2

かに作物が育たないかもしないという土地に種をまくように種麦代を渡したりした。御厨の年貢を3年間くらいただにした。神様に祀られた理由はその関係が大きかったようだ。伊奈忠順の亡くなった後、甥の伊奈半左エ門忠道が後を継ぎ、20年位御厨を治め、功績があるが、今は全部忠順の功績になっている。伊奈神社に祀られるまでは、その次の領主たちの批判が多くかった。領主が変わるたびに批判が大きくなり、その反面忠順の評価がどんどん上がり神様に祀ろうという話になった。駿府の米蔵を開いて…という話は大正時代になってから。渡辺丹治が伊奈半左エ門の功績を書き、吉久保に水神社に碑を建てる。徳富蘇峰と2人で伝説を作り上げる。それをテーマに新田次郎が小説を作ったので、駿府の米蔵を開いて御厨の人を救ったという伝説が出来た。

銅像は農協の御殿場支所の前にあった。昔の伊奈神社の祠の位を上げてもらおうという贈位運動を大正天皇が認め、神社の格が上がる。国家神道なので、今のお宮さんという考え方と違う。今ではお祭りをいくつかの地区が持ち回りでやっている。ここへ来る前は、「上真土」という所にあった。



一十分一役所跡

この一角だけ町有地になっている。

須走の関所があった。須走には戦国時代にも関所があった。須走役所と言って、通行料を取るためのもの。中世、戦国時代より前は関所を大名が作り、そこを通る人から関銭という通行量を取り、それで浅間神社を修復したりしていた。中世の須走役所もここにあったと思う。道者関といって、富士山に来る人から入山料を取っていた。江戸時代には山役銭というものを中宮御室浅間神社で取っていた。頂上直下にあった橋役所で登頂料(橋役銭)を取っていた。これを払わないと頂上へ行けなかった。須走は2回お金を取りられた。

幕府の収入になる、村の収入になるという2つの説があった。十分の一役所は、荷物の十分の一の金額を払う。宝永噴火の後、須走に馬がなくなり、一時荷運びをやめないといけなくなった。その時、山中湖村から荷継ぎの連中が入ってきたが、再開できる時にもめたということが書かれている。大事な収入源だったと思う。



その3

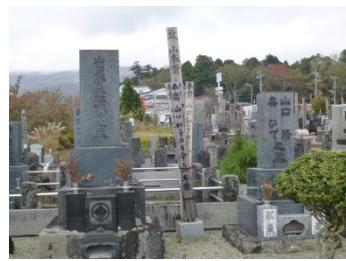
<p>ーたき道の道標</p> <p>この向こうに精進川という川が流れていってそこに滝があつた。</p> <p>道標</p> <p>(正面)たき道 (向左)宝暦十三(1763)葵未年六月吉日 願主 (向右裏)江戸桜本坊 大峯惣講中 北八丁堀三 丁目米屋善平治 (裏面)たき道</p> <p>大峯惣講中という講の米屋善平治という人が寄付したもの。大峯山だけでなく、富士山にも来ていたんだと思う。これも富士山の巡拝の道の一つの構成資産。</p>	
<p>ー滝不動石仏銘</p> <p>滝の上にお不動さんがあった。精進川という地名。地名が出来た時から参詣者が精進する川だったという事が分かる。もともとはここに石仏があった。御中道内外八湖修行 権少教正 梶豊 七十七歳。梶豊さんは須走の人。碑を建てたのは、相模国足柄上郡 和田河原村 願主田代昌蔵 露木政吉。南足柄の富士講道者。富士山へ登るのと同時にお中道もやり、富士八湖(富士五湖に加えて田貫湖、四尾連(しびれ)湖など)を回ったという記念碑を建てた場所。</p> <p>後ろに「何妙法蓮華」と書いてある。この辺の日蓮宗のお寺は、沼津の岡宮にある光長寺の末寺である神山の本国寺、中丸の蓮静寺、湯船の本蓮寺、竹ノ下の常唱院 4つのお寺。</p>	
<p>ースタール博士の碑</p> <p>スター博士はシカゴ大学の人類学教授であったが、明治 37 年に初めて日本に来てから非常に日本に親しみを覚え、その後何回か来るうちに深く日本人の生活に入り込み、日本人以上の日本人を以て任ずるようになった。東大の学生だった安田貞治という富士山の本の収集をしていた人と、浅間神社に碑がある曾我部一紅と 3 人でいつも大糸谷にいつも泊まっていた。皆、富士山の研究家。「安田文庫」が小山町の図書館にある。</p>	
<p>ー西寿院跡</p> <p>仏教のお寺。頭の丸くなった塔は歴代住職のお墓。無縫塔、卵塔とも言う。本寺が御殿場の宝持院。廃寺になった時に全部宝持院を持って行った。大日如来の鉄の像に、下野の国 小山の〇〇と彫られている。富士山にあったものが廃仏毀釈で麓へ、それから宝持院にいった。</p>	

その4

一永昌寺跡

永昌寺は御殿場の大雲院にいった。木の角柱があるが、江戸時代は仏教だったが、今は神道の祀り方になっている。

須走は廢仏毀釈の時に一度に全村神道になつたので、激しい変わり方をした。



一浅間神社の境内

静岡県では一番北にあるハルニレ。町の記念物になつてある根上がりモミも下の砂がさらわれる。根が上がって出てくる。

富士山研究者曾我部一紅君の碑。87回登山し、元治元年に生まれ、大正12年の9月に大震災で亡くなる。富士山の関係の蔵書がたくさんあったが、全部焼かれた。これを建てたのがスター博士と安田貞治さん、大米谷の米山さん。

末社・恵比須大国社。浅間さんの本社の分社。富士紡1・2工場の鎮守さんだった。棟札を見ると、コノハナサクヤヒメノミコトとなっている。当時の文化財保護審議会の委員 渡邊喜一先生に話をしたら、浅間神社に引き取ろうかという話をしてくれた。彫刻が素晴らしい。移築の費用が1,000万円かかったらしい。

石碑：字を読むと誰が何のために、いつ奉納したか大体わかる。川崎久左衛門、御殿場の商人。山中兵右衛門、御殿場の酒屋日野屋山中兵右衛門商店のご先祖さん。



庚申塔：①「見ざる・言わざる・聞かざる」②「月と太陽」③「青面金剛像」のどれかが彫ってあれば、庚申塔と考えればよい。この辺でも庚申の日が60日に一度くるが、夜集まって庚申講というのをやっている。庚申の日の夜寝てしまうと、蚕糸の虫（中国の伝説・信仰）が寝てしまった人の悪口を天井に行って閻魔様に言いつけるので、夜寝ないで過ごそうという信仰があり、この辺でもいまだにやっている所がある。今は簡略化して、ご飯を食べ、お経を上げてお酒を呑んで終わり。御殿場の庚申寺でお札を出して庚申信仰を広めている。富士山とは縁の深い仏様。



その5

<p>一千体仏像・千体弥陀堂跡</p> <p>管理は浅間さんの神主さん的小野さん。廃仏毀釈の時に須走から仏像をなくせ、ということで最初に香積寺へ運ばれる。香積寺の本寺が大雲院だったので、今は大雲院にある。立派な仏像。神仏混交だった時は、ここも大日堂も普通に登山者が行ったり、村の人たちがお参りに行った記録が残っている。江戸時代までは、この辺は仏と神様が一緒に信仰していた。大日堂は浅間さんの神主さん的小野さんがお参りに行っている。大日堂は浄土宗のお寺だった。廃仏毀釈はちょっとした文化大革命である。</p>	
<p>一 香積寺跡</p> <p>香積寺があったという事を示す唯一の場所。住職のお墓が揃っている。お寺があったところじゃないとい。真ん中は、開山塔。初代住職のお墓。江戸時代宝永噴火のすぐ後。</p> <p>曹洞宗 本尊千手觀音。慶安元年（1648 年）の須走村検地帳に「免香積寺」として、屋敷七畝歩が見える。そのほか香積寺が「寺中」四筆、香積寺沙弥が「出口」一筆の畠の名請人として見える。「深沢村大雲院末、禅宗向富山香積寺、高九斗二升内二斗二升御年貢地、七斗御除地」とある。二斗二升が年貢を払わなければならぬ土地で、七斗が年貢を免除される土地。免除地の他に土地を持っているお寺はあまりない。大きいお寺。</p>	